

平成 26 年度土曜日の公開授業研究事業実施報告書

学校番号	42	学校名	県立静岡東高等学校
対象課程・学科・学年		全日制の課程・普通科・全学年	

1 研究のねらい

平成 23・24 年度の 2 年間実施した土曜公開授業は、教育活動の充実に成果をもたらしたが、生徒や職員には負担感が少なからずあった。これを軽減し、さらに効果的なものにするにより「授業→部活動→家庭学習」の生活リズムに基づいた、質の高い文武両道を実現する。

2 研究の概要

(1) 生徒の負担に配慮した実施日の適切な設定

生徒の公欠が少ない、高体連主催大会の非開催日に土曜公開授業を設定するとともに、2 週連続とならないようにする。また、模試はなるべく土曜公開授業と同じ週に重ならないように計画する。

公欠と認める試合を、原則として高体連及び高文連主催の公式試合に限定し、平成 26 年度からは、公欠した生徒を対象に、公欠した授業内容をフォローするシステムを設ける。

(2) 土曜公開授業の効果的な実施

時間割の変更がしやすいように、土曜日はクラス単独の授業を多くして、教員の出張によって自習となる授業を極力減らす。

(3) 職員の勤務時間管理に配慮した校内体制

土曜勤務の 4 時間の振替を取りやすくするために、すべての教員について 2 週間に 1 日は、担当する授業が午前中のみ又は午後のみとする日を設定する。

3 実施日程及び内容

(1) 実施日（生徒の振替日）

4 月 12 日（5 月 20 日）	※ 9 月 20 日（10 月 8 日）
4 月 26 日（5 月 21 日）	10 月 4 日（2 年 11/25、他 12/2）
5 月 17 日（5 月 22 日）	11 月 15 日（2 年 11/26、他 12/3）
6 月 7 日（7 月 1 日）	12 月 13 日（2 年 11/27、他 12/4）
6 月 21 日（7 月 2 日）	1 月 10 日（12 月 19 日）
7 月 12 日（7 月 3 日）	1 月 24 日（2 月 26 日）
※ 9 月 6 日（10 月 7 日）	2 月 7 日（2 月 27 日） 計 14 回

すべてを公開授業としたが、中学校に周知したのは、6 月 7 日～1 月 24 日（10 月 4 日を除く。）の 9 回である。なお、上記※の 2 回は、部活動見学の時間を設けた。

(2) 実施時間と内容

【通常】		(本校生徒)	(参加者)
	8 : 35	登校	
1 限	8 : 35～9 : 40	授業	受付・学校説明
2 限	9 : 50～10 : 55	授業	授業見学
3 限	11 : 05～12 : 10	授業	授業見学
【9/6、9/20 の 2 回】		(本校生徒)	(参加者)
	8 : 35	登校	
1 限	8 : 35～9 : 25	授業	受付・学校説明
2 限	9 : 35～10 : 25	授業	授業見学
3 限	10 : 35～12 : 10	部活動	部活動見学

4 実施上留意した事項

- (1) 土曜公開授業当日の朝の清掃、受付・誘導を丁寧に行うなど、学校全体で参加者を迎える態勢を整えた。
- (2) 教職員や生徒、中学生の負担を考慮し、部活動公開も含めて、午前中に終了できるように時間割を工夫した。

5 研究の成果

(1) 「生徒の負担に配慮した実施日の適切な設定」について

ア 実施日の設定が生徒の負担に配慮されているかどうかについては、生徒の74%（前年比18ポイント増）、教員の95%（同27ポイント増）が肯定している。公式試合や模試の多い月は土曜公開授業を1回とし、不足した授業時間は行事が行われる平日の午前中に確保した。2週連続の土曜公開授業や、土曜公開授業と模試が土日に続くことを皆無にしたことが、負担軽減につながったものと思われる。

イ 平成26年度は新たに、土曜公開授業を公欠する生徒への授業フォローシステムを設けた。

(ア) 公欠する生徒は、その週の水曜日までに授業担当者に公欠届を提出する。

(イ) 授業担当者は、土曜日の授業内容や学習指示を記入したフォローカードを金曜日までに公欠する生徒に渡す。配布プリントがある場合は、それも同時に配布する。

(ウ) 公欠する生徒はそれらに従って土日に家庭学習し、質問等があれば翌週の月曜日の朝にフォロー願いを授業担当者に提出し、放課後に設定されたフォロータイム中に質問することができる。設定された時間内にできない場合は、授業担当者と相談し、その週のうちに適宜実施する。

アンケートの結果、フォローカードの配布はほぼ全員の教員が行ったが、実際にフォローができたと思っている教員は約2/3（68%）にとどまっている。これは、フォロー願いを提出した生徒が少ない（公欠した生徒の13%）ことに起因すると思われるが、生徒アンケートでは、公欠した生徒の約2/3（65%）がこのフォローシステムの有効性を認めている。

(2) 「土曜公開授業の効果的な実施」について

ア 「平日放課後の時間のゆとりの保障」や「授業→部活動→家庭学習の生活リズムの保持」については、生徒の約8割、教員の約9割がその意義を認めている。「一週間の生活習慣や学習習慣がつくか」についての評価が上記に比べて低いのは、土曜公開授業が隔週であることに起因していると思われる。

イ 生徒、教員ともほぼ8割が「土曜公開授業そのものが効果的に行われている」と認識している。

ウ 時間割に配慮した結果、出張時に授業を振り替えることによって自習を回避できた教員は88%で、前年より16ポイント増加した。

エ 学力向上への効果について

次の表は、模試における英数国3教科平均偏差値を表している。

入学年度	1年7・11月平均	2年7・11月平均	1年→2年増減	3年7月	1年→3年増減
19	55.6	54.2	-1.4	52.2	-3.4
20	55.7	55.7	0.0	53.9	-1.8
21	57.2	54.2	-3.0	53.4	-3.8
22	59.8	56.8	-3.0	54.1	-5.7
23	56.9	56.7	-0.2	54.9	-2.0
24	56.9	56.6	-0.3	53.6	-3.3
25	55.4	55.7	+0.3		

本校では、平成23年度から土曜公開授業を実施している。1年から2年の増減を見ると、平成22年度以前の入学生では平均して1.85ポイントの減少であるのに対し、平成23年度以後の入学生では、平均して0.07ポイントの減少にとどまっている。このことにより、土曜公開授業は学力維持にも良い影響を与えていると考えられる。

(3) 「職員の勤務時間管理に配慮した校内体制の在り方」について

ア すべての教員の時間割において、2週間に1日は午前のみ又は午後のみの日を設定している。教職員は各自の都合の良い振替日を選び、ネットワーク上のファイルに入力し、管理職はそのファイルをチェックして勤務時間管理を行っている。管理職がきめ細かくチェックして指導した結果、1月末時点における土曜勤務の振替実施率は100%である。

6 実施上の課題及び解決策等

(1) 公欠者を減らすための、より適切な実施日の設定

高体連主催大会の非開催日に実施日を設定したが、当該日には、競技団体主催の大会が入ることが多く、公欠した生徒はかなり多くなってしまった。本年度は、公欠が多くなる時期と3年生の模試が連続する時期（5、10、11月）は土曜公開授業を月1回としたが、それでも公欠者数はあまり減っていない。来年度は過去のデータを分析し、公欠者がより少なくなると思われる土曜日を予想して実施日を設定することが重要である。

(2) 公欠者の授業フォローの日の部活動休止の徹底

5(1)イで記述したように、本年度から公欠する生徒への授業フォローシステムを設定した。実際にフォロー願いを提出した生徒は、公欠した生徒の13%であったが、そのうちの61%がフォローに満足したと回答し、フォローを1回も受けなかった生徒（公欠者の87%）も66%が、受けなかった理由として「フォローカードによる学習で問題なかったため、受ける必要がなかった。」と回答している。これらの結果は、このシステムの有効性を認めた生徒が65%である点とほぼ合致し、生徒の3人に2人が、このシステムの有効性を認めていることを示している。

しかし、フォローを受けなかった理由として、「質問したかったが、部活動に支障が生ずるから」と答えた生徒が13%いたことは、今後の課題である。公欠者のいる部活動は、原則としてフォローの日は活動しないことになっている。フォローの日である月曜日は、週1回の休部日としている運動部が多いので、部全体として活動しないことをいかに徹底できるかが大きな課題であり、これには顧問の理解と協力が不可欠であろう。

7 考察

平成23・24年度と平成25・26年度（本研究）の計4年間にわたる研究指定により、土曜公開授業は文武両道を目指す本校にとって、なくてはならないものになりつつある。教員も生徒も多少の負担感はあるが、部活動や補習、面談や会議を実施するための放課後のゆとりを生み出している。

生徒の負担感をいかに減らすかに重点を置いて研究してきたが、実施日の適切な設定や回数などを工夫し、その効果をアンケート結果で検証することができた。今後は、公欠者をいかに少なくするか検討するとともに、公欠者に対する授業フォローにも力を入れていきたい。本年度は学校全体でフォロータイムの取組を始めた初年度であった。フォロータイムに質問に来る生徒は思ったより少なかったが、フォローカードによる学習で十分だったからと回答した生徒も多かったことから、フォロータイムの希望者が少なくても、このシステムは続けていくべきであろう。

教員の土曜勤務の振替については、取得可能期間（現在は前4週・後8週）をもう少し拡張したり、土曜日2回を合わせて1日の振替とすることができれば、振替を実施しやすくなり、教員の負担感もより軽減されるのではないかと思われる。